

【SS】障壁無効化技術

衣玖矢曇

ショートショート2

あるところに足の不自由なメガネの男がいた。

彼は、自らの逆境に負けることのないよう、日々、研究に精進した。

十年後、とうとう彼は、人類の夢、タイムマシンを完成させたのだ。

彼は、太古の日本へと時空の旅へと出かけた。

彼は、車椅子で太古の大地を踏みしめた。

そこで、目の悪い農民に出会った。

農民「ほう、アンタのかけてる"メガネ"ってのは、非常に良いね。」

男「そうですか？」男は何が良いのかさっぱりわからない。

農民「私たちは、目を悪くするとそれっきりさ、立派な障害者さ。」

男「なるほど、確かに足が悪く車椅子生活に障害者という認識はあったが、目が悪いということに障害者という意識はなかったなあ。」男はピリオドギャップを感じる。

農民「しかしなんだい、アンタの乗ってる不思議な椅子はなんだい？」

男「ああ、これは車椅子さ、私は自動車に跳ねられて以来、これが無いと移動出来ないのさ。」

農民「はあ、未来には、そんなおっかないものが走ってるのかい。怖いね。」

男は閃き、現代を通り越して、未来に行くことへ、決めた。

男は、タイムマシンで未来に着いた。

そこで、未来人に車椅子に代わるものがないか尋ねた。

未来人「ああ、あるよ精巧な義体さ、これさえ、あれば普通の健康体と何ら変わらないよ。」

やはりだ、男は納得する。

自分が障害感じるものは、時代の科学技術力が上がれば、障害ではなくなるのだ。

義体化手術も終え、男は大満足した。

そんな男の前を脳みそだけが、水槽にプカプカ浮いた奇妙なロボットが現れた。

男「どうかされたんですか？」男は、思わず聞いてみた。

奇妙なロボット「やあ、僕は大事故でね、脳みそだけしか残らなかったんだよ。」

男「大事故？」

奇妙なロボット「ああ、この時代は、飛行自動車が全盛でね、飛行自動車が空中から落ちてきてね、この有様さ。この体が無いと、生活出来ないのさ。ああ、早く人体形成技術が出来ないかなあ。」